

巻 頭 言

外部にいと、日本国内における学会活動の重要性が痛いほどよく分かる。

いわずもがな、日本の惑星科学会がこれまでに当研究分野に果たした役割は実に偉大だ。国際共同研究が盛んになったとはいえ、一国の研究者が主導して開拓したさまざまな研究成果とその多様性に驚嘆せざるをえない。宇宙探査や試料分析、惑星形成・系外惑星の観測とそれらを支える理論研究など、どれも目を見張るものばかりである。私の研究室のゼミにおいて、これらの日本人研究者が中心になって実施された研究成果論文がしばしば紹介されてきたが、どの内容も面白いと感じると同時に、日本人であることを誇りに思う。先人たちが築き上げてきた強靱な研究基盤と、脈々と受け継がれてきた人材育成のたまものである。

ところで、私のような幽霊会員に巻頭言のお話をいただき、大変恐縮している。私は、現在の所属機関に就職して以来、講義や学内の国外出張制限規則もあり、15年以上秋季講演会に参加していないからだ。私の勤務地である韓国の大学において、太陽系分野の研究ができる大学は本学以外にないと言っても過言ではない。しかし太陽系や惑星の研究に興味を持って本学を志願する学生は後を絶たず、こうした学生と国内の学会（例えば韓国天文学会）で発表するのだが、聴衆に専門家がほとんどいないため、まともな議論をできないのが実情だ。

まれに日本の研究会（例えば連合大会）に参加すると、私の理解が主流から取り残されていると痛感することがある。日本国内のさまざまな研究会において、多様で徹底した議論が母国語である「日本語」を用いてできることはとても重要なことだと思う。韓国から日本までの旅費は安いとはいえ、当研究室の学生にとって言語の壁は大きい。正直、羨ましい。

今後も学会内での活発な議論を通して日本惑星科学会がさらに発展し、第一線で活躍する人材が生まれ続けることを隣国より願っている。

石黒 正晃（ソウル大学 物理天文学部）